

# タンザニア、サンダウエの環境利用の変遷をめぐる政治生態学的研究

平成 15 年入  
派遣先国：タンザニア共和国  
八塚 春名

キーワード：サンダウエ，ハツツア，生業活動，環境利用の変遷，先住民

## 対象とする問題の概要

グローバリゼーションの影響がアフリカの隅々まで及ぶ現在、先住社会、あるいは狩猟採集社会がどのように現代社会に定置されるべきかという議論は、政治的、文化的文脈のなかで、様々におこなわれてきた。このような議論において、もっとも重視されるべきことのひとつに、かれらの生業基盤の維持が挙げられる。都市以外のアフリカにおける生業は、今も昔も、かれらの環境利用と密接に繋がってきた。そこで、現在の先住民の生存戦略を、社会・環境・文化の変容を経験した結果、成立した人と環境の関係性として評価し、「生態史」の視点を踏まえて総合的に分析することが必要ではなかろうか。

## 研究目的

本研究で対象とするのは、いずれも東アフリカに居住するコイサン語族のサンダウエとハツツアである。コイサン語族はこれまで「狩猟採集生活を送る人びと」というイメージを広くもたれてきたが、私がこれまで研究を続けてきたサンダウエは、植民地期にはすでに農耕を基盤とした生活を送っていたという先行研究があり、これまで、狩猟採集民や先住民として注目されることはなかった。一方ハツツアは、今日まで狩猟採集を続けてきたものの、便利で近代的な生活に移行させることをめざし、定住化や教育、医療の普及をめざした保護政策が幾度となく実行されてきた。本研究では、このように対照的な道をたどってきた両者の生業をめぐる政治的な変化を踏まえて、環境利用の現状を比較することから、かれらの生業基盤の維持について考えることを目的とする。

## フィールドワークから得られた知見について

サンダウエの居住地域における調査村では、1970 年代初頭に行われた集住化直後、県の農業普及員の指導のもと、それまで未利用だった土地に村の集団農場が作られた。集団農場はたった 3 年で崩壊したが、人々の記憶には、それまで未利用だった湿地が、「よく肥えた土地」として印象付けられるきっかけになった。2008 年以降は、換金作物栽培の増加などの理由から、この土地にこれまで以上に畑が開かれており、調査村の農耕に、より多様な選択肢を増やしている。

一方、ハツツアの居住地域は、観光客が多く来るタンザニア北部の国立公園からも近く、ハツツアの狩猟採集を見学することを目当てに観光客が訪れる。観光業で現金を稼ぎ、トウモロコシやその粉を購入しているハツツアも少なくない。また、一部では農耕も行われているが、降水量の少なさゆえ、あまり多くの収量が望めないようだ。総じて、農耕や狩猟採集といった、自然資源をかれら自身が直接利用する生業だけでなく、観光によってもたらされる現金といった、外部からもたらされるものによって生計を成り立たせている部分が多いことが示唆された。

以上から、コイサン語族とひとくくりになされがちなかれらの今日の生業活動や環境利用は、政府や外部支援の影響が関わって、大きな違いを生んでいることが明らかになった。また、ハツァの中には生業基盤が大きく揺らいでいる人が少なくなく、この問題は、かれらの土地にたいする権利の欠如と強く結びついていることも示唆された。



写真1. トウモロコシを石で砕くハツァの女性たち (カラツ県)



写真2. 集団農場跡地に開かれた畑 (コンドア県)



写真3. 集団農場跡地に開かれた畑で収穫したヒマワリを脱穀する (コンドア県)

#### 今後の展開・反省点

今後は、以上の研究成果をまとめ、調査地での報告会を行い、村人との意見交流を行いたい。また、ハツァの居住地域で農耕について、環境要因により不可能というだけでなく、移動を伴う生活を送ってきた狩猟採集民の土地に対する権利の欠如といった問題と関係させながら、その可能性を検討してみたい。